

2019（平成31）年度

24日 [○]

国 語

注意

- 1 開始の合図があるまでは、開かないこと。試験時間は、六十分である。
- 2 問題は声を出して読まないこと。
- 3 問題用紙は二十二ページ、、 の二題から成っている。
- 4 問題用紙および解答用紙に、落丁、乱丁、汚損あるいは印刷不鮮明の箇所などがあるれば、手をあげて監督者に申し出ること。ただし、**内容に関する質問は受けつけない。**
- 5 解答は必ず鉛筆を使用し、解答用紙に記入すること。
- 6 解答はすべてマーク式の解答欄①②…を丁寧に塗って解答すること。
- 7 訂正箇所は、消しゴムで完全に消すこと。
- 8 解答に関係のない符号（?レなど）や文字は記入しないこと。
- 9 解答用紙を折ったり、汚したりしないこと。

一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

日本に住むイギリス人の友人から招かれたことがあった。郊外のどこにでもありそうな日本家屋であったが、家のなかには万事イギリス風で、家族みな暮らしを楽しむ風が<sup>しの</sup>感ぜられるようであった。そうするうち、招じられるままに玄関に入って、思わず脚が<sup>すく</sup>竦んでしまった。昔の家なら<sup>注1</sup>上がり框<sup>かまち</sup>という、<sup>注2</sup>三和土<sup>さんわど</sup>と廊下とのわずか十cmほどの段差のところ、<sup>つます</sup>躓きそうになったのである。先導していた当家の主人は、外からの歩様をいささかも緩めることなく、ごく自然にこの段差を越えて、廊下を奥まで進んでいってしまった。こちらが、一瞬、脚を絡ませているのに気がついた家人は、日本人客の多くがおなじように<sup>うろた</sup>狼狽<sup>ろうたい</sup>えると<sup>かば</sup>庇<sup>ひ</sup>つてくれたものである。罨<sup>あ</sup>に掛<sup>か</sup>かるのを楽しんでるようにも見えたが、それは見当<sup>ひがめ</sup>違いの<sup>ひがめ</sup>僂<sup>う</sup>目<sup>め</sup>であろう。

家のなかでは外履きを脱いで素足かスリッパに履き替えるという日本の習慣は、

I

世界のなかでも稀有な部類に

入るだろう。夏期の高温多湿を<sup>しの</sup>凌<sup>しの</sup>ぐのに高床式としたから、家中を外履きで歩き回るのを嫌ったのだとか、椅子や寝台を使わず床に直接座ったり横たわったりしたこと、また畳という厚手なマット様のものを床に敷き詰めるようになったことなども、内外を区別する要因になったのだといわれている。それにひきかえ、日本や朝鮮半島を除く<sup>タイ</sup>タイ<sup>タイ</sup>の地域では、内外をとわず四六時中、履物を身につけることで、履物はほとんど衣服とおなじ感覚で捉えられ、<sup>はだし</sup>裸足<sup>はだし</sup>になることは着衣を脱ぐこと同然と考えるようになったという。その結果、ベッドで横になるとしても、本格的に睡眠する<sup>い</sup>がいは靴を履いたままだし、夜なども床に入る瞬間まで素足にならないという習慣ができてしまった。

履物は、人類が直立二足歩行を始めてからも、かなり長いあいだ必要性を感じなかった日用品のひとつである。いまもお素足で生活の不自由を<sup>いと</sup>厭<sup>いと</sup>わない人びとが世界にはたくさんいるし、原始的生活を想像させるイメージでも、装飾具や腰覆いはつけながら、なぜか履物に類するものは<sup>あしもと</sup>足許<sup>あしもと</sup>にない。足は、顔とおなじように、いやそれいじょうに苛酷な自然条件に耐えるものなのであろう。ということは、紀元前二〇〇〇年ころとされる履物の起源以降、わずか四千年間における履物のヘン<sup>イ</sup>セン<sup>イ</sup>は、まことに驚異的、文字どおり長足の進化を<sup>た</sup>辿<sup>た</sup>ったということになる。

II

それが人類史のなかでも文明の

時代といわれる時期とぴったり符合していることを考えると、履物を交点としたさまざまな文化現象（たとえば、建物の構造や意匠、敷物、靴下等の服飾観、人びとの清潔感の変化、履物に起因する各種疾病、歩行をめぐる人間工学、そしてもちろん履物自体の構造や意匠、運動靴などの機能性、素材の入手法や開発、製造技術、社会的記号性等々）が、この間に顕れてきたことは容易に想像がつく。

ここで、文化と国家の問題を考えるために履物の話をもち出したのは、しかし、そうした履物の文化史を始めるためではない。冒頭に示した逸話は、文化という社会的な約束事、いわば観念の産物にすぎないものが、人間の生理、生体としての物理的機能をも拘束するということを再確認するためであった（ことの真意が、精神と肉体の分離を謳う心身二元論への対置にあることはいうまでもない）。

Ⅲ、靴を履いたまま家のなかには上がらないという生活習慣があるからこそ、それを日々実践する人間は玄関先で、どうしても脚が一步先に進まないのである（そうした生活習慣のことを、われわれは文化と呼んでいる）。それは、呪縛と呼んでもよいような肉体への拘束ではあるが、たとえば、空き巣狙いや強盗、押し込みがこれを平然とやっつてのけることを考えると、その呪縛も、自文化に対する関わり方、その時間と場所によって可変的であることも分かる（泥棒も、まさか自宅では履物を脱ぐだろう）。この同じ事態を人間の側から見れば、人間は文化被拘束の存在だと表現することができる。それは、人間が無媒介な存在、すなわち実体的存在であるとする伝統的主体主義の言表に対する反省の表現でもあることはいうまでもない。

人間は観念の動物であるといわれるが、個人の特殊な観念ではなく、複数、多数の人間による共同的な観念（これを「共同主観性 (Inter subjectivity)」と呼ぶこともある）が、個々の人間の生理に大きな影響を及ぼしている例は、ほかにもたくさんある。冒頭で紹介した蹴躓きの一件は、筋肉の物理的な機能に関わる事例であるが、そうした文化的な拘束は人間の生体的機能のすべてにわたっているのである。たとえば、聴覚に関する例では、さまざまな動物の鳴き声の違いが比較文化の話題としてよく紹介されている。イヌは、日本で「ワンワン」と鳴き、イギリスでは「bow wow」と吠える。ネコは「ニャーニャ

「」に対し「mew」、ニワトリは「cok-cok-cok」と「cock-a-doodle-doo」、ヒツジは「メーメー」と「baa baa」という具合に、その対照<sup>(あ)</sup>ぶりは異文化への好奇心を掻き立てるに十分なほど鮮やかである。

それらは、いうまでもないことながら、それぞれの動物の種類が違っているのでも、聴く条件が異なっているのでもない。同一の音源に対して、まったく違う感覚的反応をするのである。つまり、おなじイヌの鳴き声を聴いても、日本人には「ワンワン」としか聴こえないのであり、英国人には「bow wow」<sup>(い)</sup>が聴こえないということなのである。音声进行分析する機器にかければ、どちらもおなじ測定結果が出されるわけで、とすれば、物理的な因果関係の問題ではなく、文化的な認知の問題だということになる。人間がたんなる受容器官ではなく、文化的な（文化被拘束の）生き物である<sup>(ゆえん)</sup>所以がここにある。

動物の鳴き声は、その動物が人間の生活に近いほど多種多様な鳴き声をもっている。それは、日々の生活の必要から生み出されたからにはかならない（同一の魚の名称が、各地で異なっていたり、成長することに名称が変わったりするのもおなじ理由による）。いずれにせよ、現象に対する名付け、すなわち言葉と深い関係にあることは事実で、そうすると、同一言語内の方言にしる、異言語にしる、言葉の種類とおなじ数だけ鳴き声の表現も可能だといえるだろう。ということは、人間が動物の鳴き声を聴くということは、音の刺激に対して言葉を当てるという<sup>(て)</sup>手続を踏むのではなく、むしろ、言葉が音を創出するとさえいっても過言でないことになる。そのことは、たとえば<sup>(い)</sup>劇画<sup>注3</sup>などで多用される擬声語（onomatopoeia）を見たときに鮮明に実感できることでもある。音は、本来、それ自体不可視のものではあるが、文字化することで、音の実態そのものが実在性を増すことがありえるのである。ただ、これも、その擬声語を含む言語（ないし表記法とその音声化の規則）を知っていることが前提になっているわけで、その意味においても、やはり文化拘束的というほかはない。

聴覚が文化によって左右されるといふ例は、虫の音の捉え方にも表れている。日本では、秋の夜長を彩るさまざまな虫の音は、季節の徴表として<sup>(い)</sup>風流とも野趣<sup>あふ</sup>溢れるものとも受け取られているが、西欧においては、たんなる自然世界の音、ときには雑音とさえ受け止められているという。これは、右脳／左脳の受容器官の違いから説き起こされた興味深い知見ではあるが、それを正の価値として生理的に育む過程が日常的伝承や積年の知的遺産など文化的な影響下になされてきたことは間違いない

し、ましてや、そこから齎もたらされるさまざまな波及効果（詩歌に詠み込んだり、心理リョウホウに応用したり、サウンドスケープといわれる環境音楽に採られたり）が文化的な内容を豊富にもっていることはいうまでもない。

そもそも人間の感覚器官がきわめて限定された範囲でしか実在の世界と向き合えないことは、多くの生理学的な知見が教えてくれている。聴覚には周波数の可聴域があるし、視覚にも可視光線の範囲と可視のための諸条件がある。触覚や嗅覚はさらに習慣性が強く、受容のサクゴ（工）や麻痺まひすらが起こる。味覚にいたっては、文化拘束性が一段と高まるばかりか、好き嫌いに始まる個体差が著しく、ほとんど客観的な受容の事実を確定することは困難である。ことほどさように、感覚を媒介するかぎり、人間はひじょうに小さな窓からのみ実在世界を眺めているにすぎないのである。

それでも、これらはどれもまだ物理化学的な刺激・受容、いわば客観的に同定できる段階での限定なのだが、これに文化的なバイアス（歪み）が加わるのだから、人間が針の穴を通すようにして世界を覗のぞき見ていることは明らかだ。裏返していえば、人間が語っている世界は、客観的に受け取った実在そのものの世界ではなく、むしろ人間が構想した、主観による世界だと考えた方が、却かえって正直というものだろう。しかも、その主観は、地域によって、また、それぞれの歴史によってさまざまに異なるものであることも注意しておきたい。人間は、そうした主観という眼鏡を通してしか世界が見られないのである。この、独我的な主観ではなく、複数の人間が協働してつくりあげる共同的な主観こそが文化にほかならない。絶海の孤島で生まれ育った人間（ありえないが）には、文化は存在しない。

（山本雅男『近代文化の終焉しゅうえん』による）

注 1 上がり框——家のあがり口に渡してある横木。

2 三和土——台所や玄関の土間。

3 劇画——漫画のうち、特に写実性のある絵によって描写されるもの。

問一 傍線部(ア)～(エ)のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(ア) タイテイ

- 1 空気テイコウが少ない
- 2 誤字をテイセイする
- 3 トウテイ思いつかない
- 4 景気がテイメイする
- 5 条約をテイケツする

(イ) ヘンセン

- 1 敵地にセンニユウする
- 2 右にセンカイする
- 3 主将にスイセンする
- 4 閑職にサセンされる
- 5 事情をセンサクする

(ウ) リョウホウ

- 1 ドウリョウとの旅行
- 2 メイリョウな話し方
- 3 今月のリョウヒを払う
- 4 日本リョウリの専門店
- 5 自宅でリョウヨウする

(エ) サクゴ

- 1 果物をアツサクする
- 2 期待と不安がコウサクする
- 3 シサクを巡らす
- 4 予算をサクゲンする
- 5 タイサクを考える

問一 傍線部(あ)・(い)の語句の本文中の意味として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その

番号を答えなさい。

(あ) 対照ぶり

- 1 うまくつりあっている変化
- 2 たちまち変化していく程度
- 3 違いが際立っている様子
- 4 人の意識を引きつける魅力
- 5 心に訴えてくる感情

(い) 野趣溢れる

- 1 巧みに自然が模倣されている
- 2 生快感に浸っている
- 3 趣向を精一杯凝らしている
- 4 人の暮らしに活気がある
- 5 ひなびた味わいに満ちている

問三 空欄

I

III

に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。なお、一つの語は一回しか用いてはならない。

- 1 いくつか
- 2 つまり
- 3 おそらく
- 4 まさか
- 5 ましてや
- 6 いったい

問四

傍線部 A 畏に掛かるのを楽しんでるようにも見えた とあるが、なぜ筆者にはそう見えたのか。その理由の説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 履物を交点とした文化現象は、人類史のなかでも文明の時代といわれる時期と符合するから
- 2 イギリス人の友人は、日本人の客が狼狽えるのを知っているのに筆者に何も注意しなかったから
- 3 西洋的家屋の文化に拘束されている日本人の身体的機能は、もはや過去のものではないから
- 4 廊下に靴を履いたまま入るといふ行為に狼狽えるのは、イギリス人にとっても当然のことだから
- 5 日本人は人間中心主義の自然観を持たず、自然と一体化しそれに順応して生きる民族だから



問五 傍線部 B それは、呪縛と呼んでもよいような肉体への拘束ではあるとはどういうことか。その説明として最も適当なものゝ次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 生活習慣が肉体を拘束するのは、人間の精神への冒瀆ぼうとくでありその破壊であるということ
- 2 人間の精神は文化拘束性から自由であるが、運動神経などが侵されるといふこと
- 3 日本の伝統的履物は、人間の物理的機能を拘束するが、精神的な自由は回復するといふこと
- 4 空き巣狙いや強盗などは、自文化にまったく束縛されず奔放であるといふこと
- 5 観念の産物である文化が人間の生理や生体としての物理的機能を制約するといふこと

問六 傍線部 C 人間が無媒介な存在、すなわち実体的存在であるとはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 生活習慣は肉体までも束縛するが、その度合いは時間と場所によって可変的であるといふこと
- 2 人間は、他との関係性の中にあるのではなく、文化的拘束から自立した存在であるといふこと
- 3 土足で犯行におよぶ泥棒でも、自宅では素足であるところに人間存在の意味があるといふこと
- 4 人間は、同じ社会に属する多数の人間の共同的観念から自己の主体性をつくっていくといふこと
- 5 人間は、文化被拘束の存在であり、文化的な拘束は人間の生体機能のすべてにわたるといふこと

問七 傍線部D 鮮明に実感できるとあるが、何が実感できるといのか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 音は物理的な因果関係ではなく、言葉に対する人間の感覚的反応によって創り出されるものであるということ
- 2 多種多様な鳴き声の中から最も近いと思われる音声を文字化し表記したのが動物の鳴き声だということ
- 3 擬声語は機器の測定結果が創り出すのではなく、人間の聴覚が捉えた音に言葉を当てたものであるということ
- 4 不可視の音声を自由に受容し、場面に応じて擬声語を使い分けているのが劇面の面白さの一つであるということ
- 5 音に言葉や文字を対応させているというよりも、言葉や文字にすることで音が創り出されるのだということ

問八 傍線部 E 人間が語っている世界は、客観的に受け取った実在そのものの世界ではなくとあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 人間が感覚を用いている時点で世界の範囲が限定されているのに加え、社会的な約束事や観念によって世界の像を歪めて捉えているから
- 2 人間の感覚器官は個体差が著しく、客観的に同定できる物理化学的な刺激や受容の事実さえ受け入れようとしなくてもの事例があるから
- 3 人間の感覚器官を媒介するかぎり、そこで知覚するのは不可視でありながら実在しない世界であることを、生理学的な知見は教えているから
- 4 人間が針の穴を通すようにして小さな窓から世界を覗き、文化的なバイアスを実在として受け止めていないことは明らかだから
- 5 人間は、主観という眼鏡を通してしか世界を見ることができず、この独我的な主観によってしか客観的な認識に到達できないから

問九 本文の内容と合致するものを、次の選択肢の中から二つを選び、その番号を答えなさい。

- 1 素足で生活の不自由を厭わない人びとがいるのは、彼らの足が文化的拘束から自由であり、顔いじょうに苛酷な自然条件に耐えるものであることを示している
- 2 人類史のなかでも文明の時代といわれる四千年間の時期には、他の時期と同様にゆつくりとさまざまな文化現象が顕れてきた
- 3 同じ動物の鳴き声を聴いても、日本人と英国人とは違って聴こえるのは文化的な認知の問題であり、物理的な因果関係の問題ではない
- 4 精神と肉体の分離を謳う心身二元論が出現したことによって、人間ははじめて自らが文化被拘束の存在であることを認知させられた
- 5 イヌの鳴き声が日本とイギリスで異なるのは、人間が文化被拘束的であるのと同様、動物も生活環境に大きく拘束される存在であることの証である
- 6 文化は同じ地域に長く住む複数の人間による共同的な主観によってつくりあげられるので、絶海の孤島で生まれ育つた人間には文化は存在しない

## 二

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

近代科学が一七世紀を中心とする「科学革命」とよばれる時代に誕生したことはよく知られている。科学革命の時代には、科学の研究教育制度が整っておらず、「科学者 (scientist)」という名称もないなど、科学を巡る社会的条件が現在とは大きく異なっていた。それでも科学革命の時代には、それ以前には見られない科学という文化の

見出すことができる。その中の一つに、<sup>A</sup>微分積分学の基礎を巡るニュートンとライプニッツの先取権論争がある。

### I

な特徴を示す事例を

微分積分学は量の変化を扱う数学の分野であり、現在では科学のほぼすべての領域で用いられている。ニュートンとライプニッツは、この分野の開拓者として早くから大きな影響力をもっていた。ニュートンは一六六〇年中頃から微分積分学を研究し始め、一六七〇年代には、自身の研究についての書簡を、ライプニッツも含めたヨーロッパ中の数学者たちとやり取りしていた。ライプニッツもニュートンとは独立にこの問題に早くから取り組んでおり、一六八四年一〇月にドイツで発行されたいた学術雑誌にその成果を論文として発表した。ここから先取権論争が始まる。ニュートンとその支持者たちは、ライプニッツがニュートンの研究成果を剽窃したとみなし、一六九〇年代末からライプニッツを公然と非難するようになった。これに対してライプニッツとその支持者たちもニュートン側の批判に反論して対立が深まっていった。

一七二二年三月に、当時ニュートンが会長を務めていたロンドンのロイヤルソサイエティーにこの問題を調査する委員会が設置されると、二カ月後にはライプニッツがニュートンの研究成果を剽窃したとする報告書が提出された。この報告書には、ニュートンが書いた書簡や論文の抄録などが証拠として収められており、一七一三年に印刷公表された。これによってライプニッツが剽窃したという見方が広く受け入れられることになったのである。

二〇世紀に始まった

### II

な科学史研究では、ニュートンとライプニッツはそれぞれ独立に微分積分学の基礎に辿り着いたと考えられている。ライプニッツが論文発表前に見たニュートンの書簡には、研究の核心部分は書かれていなかった。

一方、ニュートン側が剽窃の証拠とした様々な文書には、日付や内容の改竄が見られるという。現代的な観点からすると、二

ユートンが同様の研究を進めていることを書簡で知りながら自身の論文で言及しなかったライブニッツにも、ライブニッツの剽窃を結論付けるために証拠を改竄したニュートンたちにも、問題があったということになる。

微分積分学の基礎を巡る先取権論争は、科学革命期における研究競争を生々しく伝える格好の事例である。当時の科学者たちが研究における先取権を非常に重視していたことや、研究不正を疑って激しく論争したところは、現在の研究の最前線と何ら変わりない。このような事象は科学革命以前にはほとんど見られないのに対し、科学革命以降にはしばしば発生するようになる。科学革命期の科学は、現在に比べれば規模も小さく、研究内容も

Ⅲ 段階に止まっており、研究を支える社会的な制度も整っていなかった。それでも、ここで見た研究競争や研究不正のように、現在と同様な「科学という文化」が出現していたのである。

科学革命期には未成熟だった科学を巡る社会的制度が整い始めたのは一九世紀である。「科学者」という名称が提案されたのは一九世紀前半のイギリスであり、大学が科学の研究と教育を結び付ける機関となったのは一九世紀初頭のドイツであった。このように社会への科学の影響が高まりつつある時代を背景として、次に取り上げる進化論を巡る論争が繰り広げられたのである。

ここで注目するのは、『種の起源』の進化論の是非を巡る論争である。それはダーウィンが『種の起源』を発表した一八五九年に始まる。ダーウィンが英国海軍の測量船「ビーグル号」に同乗して世界の海を巡り、ガラパゴス諸島や南米エンガンで生物観察をおこなったことが『種の起源』の出発点であることはよく知られている。『種の起源』の進化論は、彼に先行する科学者たちによる研究成果を「自然選択」というアイデアで統合したものだ。地質学者たちは、地球の歴史が非常に古い（当時は数百万年程度）と考えていた。化石の発見や家畜などの品種改良から、生物種が絶滅したり変化したりするという考えが生まれた。また、生物が環境に「適応」し、生き残るため互いに「生存競争」をしているという考えも提唱されていた。ダーウィンがこうした様々な考えを統合する核としたのは、『種の起源』の原題にある「生存競争において有利な形質をもつ種が存続する (the preservation of favoured races in the struggle for life)」と「自然選択」である。

『種の起源』の発表は大きな論争を巻き起こしたが、その論争には二つの要素が混在している。一つは現象を説明する科学理論としての進化論の妥当性を問うものである。もう一つは人間を含めた生物のあり方を進化論で説明することの是非である。現在のわれわれからすると、科学理論としての進化論はすんなり受け入れられたように見えるかもしれない。だが、他の科学理論と同様に、科学理論としての進化論も多くの批判に晒されたのである。ここでは二つの困難について見ておこう。

ダーウインは現在の生物進化に必要な時間を数億年と見積もっていた。これに対して、後にケルヴィン卿となる著名な物理学者のウィリアム・トムソンは一八六一年に地球の年齢が約一億年であるとする説を発表しており、数千万年程度であるとす  
る科学者もいた。どちらの説もダーウインが進化に必要と考えた時間より短い。現在では太陽系の形成理論から地球の年齢は四五億年程度と考えられて、X。この事例から分かるように、科学理論としての進化論の妥当性は、他の分野の知見にも影響されるのである。

ii 進化論の中で一九世紀の人々にとっても理解困難だったのは、「自然選択」という考え方だった。先に見たように、「自然選択」は「生存競争において有利な形質をもつ種が存続する」ことを意味する。このうち生存競争という考えは、当時広く受け入れられていた。だが、生存競争に「有利な形質をもつ種」はどこから来るのか。それぞれの個体もつ形質が親から子に伝えられる（遺伝する）という考えはあったものの、その過程でどのように「有利な形質をもつ」ようになるのか。現在ならば、形質の伝達や変化には遺伝子が関わっていると説明される。遺伝子という考えも、それを裏付けるための実験も存在しなかった一九世紀に、そうした説明ができるはずもない。また、遺伝子が発現する過程には現在でも不明な点が数多く残っている。つまり、自然選択説については進化論発表当時はもちろんのこと、現在でも完全に解明されているわけではないのである。

c 進化論を巡る論争の多くは、人間を含めた生物のあり方を進化論で説明することの是非を巡って戦わされた。気を付けなければならぬのは、この論争が科学対宗教という単純な構造ではないということである。聖職者の中には進化論が聖書に書かれている天地創造などの記述と矛盾するとして反対する者が多かったが、進化論に肯定的な者も少なくなかった。進化論に肯



定的な聖職者たちは、おおまかにいえば<sup>iii</sup>進化論と矛盾しないように聖書を解釈しようとしたのである。こうした主張に対して、聖書の記述を字義通り解釈すべきであると考える人々が強く反発して大論争になった。その結果、教会内での進化論の受容が進む一方で、教会関係者が科学の議論を<sup>iv</sup>ケイエンする傾向が強まることになった。つまり、宗教が科学から遠ざかるようになったのである。

<sup>v</sup>進化論に批判的な科学者の中には、ダーウィンと同時期に進化論を唱えた博物学者ウォレスも含まれている。ウォレスが問題にしたのは、自然選択説を中核とする進化論では、人間の肉体的な形質を説明できても、人間の心や魂の出現は説明できないのではないかとのことであった。科学者だけでなく聖職者たちや一般の人々にもこのような疑問を抱く者が多かった。彼らによれば、もし心や魂が進化の過程で獲得されたのであれば、自由意志や良心は存在せず、道徳も否定されてしまうのである。ダーウィンが一八七一年に著書『人間の由来』を発表すると、論争はますます激しくなった。進化論のシンボウ<sup>vi</sup>ヤたちの中には、進化論を社会へと性急に適用しようとした人々もいた。たとえば、哲学者のハーバート・スペンサーは、自然選択説から「適者生存」という考えを提唱した。彼によると、貧困層は社会に適応できないため淘汰<sup>vii</sup>されるべき存在なのである。また、ダーウィンのいところでもあった統計学者のフランシス・ゴルトンは、品種改良を人間に適用して人間という種の改良を目指す「優生学」を提唱した。このように進化論を積極的に人間社会に適用しようとする思想は「社会進化論」と呼ばれる。「適者生存」や「優生学」という考えは社会的弱者への差別や迫害を助長する可能性がある。実際、二〇世紀には、優生学の名のもとに多くの人が迫害され命を奪われることになった。進化論と社会との軋轢<sup>viii</sup>は、その後も解消されないまま現在に至っているのである。

(野澤聡『科学とともに未来を拓く 文化としての科学』による)

注 1 剽窃——他人の文章や説をぬすみ取って、自分のものとして発表すること。

2 ロイヤルソサイエティー——一六六〇年に設立された世界最古の科学学会。



問一 傍線部(ア)～(ウ)のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(ア) エンガン

- 1 会社のエンカクを話す
- 2 エンジュク味のある演技
- 3 高速道路をエンシンする
- 4 経済的なエンジヨをする
- 5 親戚エンジャを頼る

(イ) ケイエン

- 1 剣道のケイコ
- 2 直情ケイコウな人物
- 3 賃貸借ケイヤクを結ぶ
- 4 町のケイビにあたる
- 5 豊富な知識にケイフクする

(ウ) シンポウシャ

- 1 レンポウ国家をつくる
- 2 ネンポウが上がる
- 3 外国をレキホウする
- 4 神楽をホウノウウする
- 5 ハツポウ性の飲み物

問一 傍線部(あ)・(い)の語句の本文中の意味として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(あ) 格好の

- 1 ありのままの
- 2 純粹で汚れない
- 3 ちょうどいいくらいの
- 4 姿形が整った
- 5 恥ずかしくない

(い) 軋轢

- 1 調和すること
- 2 相争うこと
- 3 仲直りすること
- 4 相互の欠点を補うこと
- 5 馬車にひかれること

問三 空欄

I

く

III

に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。なお、一つの語は一回しか用いてはならない。

1 実証的

2 同情的

3 例外的

4 典型的

5 萌芽的ほうが

6 厭世的えんせい

問四 傍線部 A 微積分学の基礎を巡るニュートンとライプニッツの先取権論争によって示された科学という文化の特徴と

して最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 科学革命期には研究教育制度が整っていなかったが、現代的な観点から見ても研究成果の発表や権利取得の方法に大きな問題はなかった
- 2 微積分学のような現代科学の基礎をなす多くの理論は、相互に影響を及ぼし合うことのない科学者個人の営みによって成立した
- 3 科学研究を巡る諸条件が現代とは大きく異なるのに、科学革命期には研究競争や研究不正といった現代的なありようが見られた
- 4 一七世紀に始まる科学革命期は科学史上の大転換期ではあったが、科学者間の影響力の格差が大きかったため、現代のような激しい研究競争は起きなかった
- 5 文化の一ジャンルでしかなかった科学は、学問として個々の科学者に対する国家の助成があつて初めて社会的に認知されるようになった

問五 傍線部 B 二つの困難とはどういうものか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 進化論は現在の生物進化に必要な時間をどう見積もっているのか、また、遺伝子が発現する時間をどう見積もっているのかという問題
- 2 生物進化にかかる時間や「自然選択」という考えは妥当なのか、また、聖書の記述と矛盾している理論を教会がどう受け入れるのかという問題
- 3 現在の生物進化に必要な時間をどう見積もるのか、また、「自然選択」という考え方では理解が難しい事象をどう科学的に説明するのかという問題
- 4 進化論は自然現象を説明する科学理論としてふさわしいのか、また、人間を含めた生物のあり方を進化論で説明することは聖書の記述にかなうのかという問題
- 5 進化論は天地創造など神の絶対性を否定するものではないのか、また、一般の人々が聖職者の存在に疑問を抱き、精神的支柱を失うのではないかという問題

問六 本文中の空欄  X に入る言葉として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 進化論と矛盾はしていない
- 2 進化論の成立は無理である
- 3 遺伝子は発見されていない
- 4 自然選択説とは対立する
- 5 天地創造説は説得力を持つ

問七 傍線部C 進化論を巡る論争の多くとあるが、本文中に示されている論点の一つを説明したものととして最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 宗教が科学から遠ざかるようになり心や魂の問題を取り上げなくなったのは、「自然選択」を中心とする進化論が提  
示されたせいではないかということ
- 2 ダーウィンが「自然選択」を中心とする進化論を主張したそもその意図は、神の存在や人間の自由意志や道徳の問  
題を否定するためではないかということ
- 3 「自然選択」の考え方は無から有を創造しうる唯一の存在である神への信仰を損なうもので、科学を過度に重要視し  
ているのではないかということ
- 4 「自然選択」を中心とする進化論は生物の「形質」の説明には適しているかもしれないが、精神面についての諸問題  
は説明不可能ではないかということ
- 5 進化論の「自然選択」の考えを広く適用すると、科学的知見を受け入れようとする教会のような存在は社会的に駆  
逐されてしまうのではないかということ

問八 二重傍線部i～vの進化論の中に一つだけ内容の違うものがあるが、それはどれか。次の選択肢の中から一つ選び、そ  
の番号を答えなさい。

- 1 i
- 2 ii
- 3 iii
- 4 iv
- 5 v

問九 本文の内容と合致するものを、次の選択肢の中から二つを選び、その番号を答えなさい。

- 1 微分積分学の基礎を巡る二人の数学者の先取権論争は、一七世紀を中心とする「科学革命」とよばれる時代に科学を巡る社会的条件が不十分ながら整っていたことを示している
- 2 ニュートンとライブニッツの先取権論争は前者の正当性が認められる形で一旦は決着したが、現代的な観点では双方ともに問題があったと言える
- 3 イギリスやドイツでは以前から科学を受け入れる考え方が形成されており、そういう社会を背景にダーウィンが発表した『種の起源』は大きな議論を巻き起こした
- 4 人間を含めた生物のあり方を進化論で説明することを巡る論争は、科学対宗教という単純な構造ではなく、教会対科学、宗教関係者対哲学などの構造をとった
- 5 進化論を肯定する聖職者たちも少なくなかったが、これに対して聖書に書いてある通りに解釈すべきであると考え人々が強く反発した
- 6 ダーウィンが先行する科学者たちの研究成果を「自然選択」というアイデアで統合した『種の起源』は、社会的弱者への差別や迫害を助長することになった

国語解答用紙

24日



一

問一	(ア)	●	②	③	④	⑤
	(イ)	①	②	③	●	⑤
	(ウ)	①	②	③	④	●
	(エ)	①	●	③	④	⑤

問二	(あ)	①	②	●	④	⑤
	(い)	①	②	③	④	●

問三	I	①	②	●	④	⑤	⑥
	II	①	②	③	④	●	⑥
	III	①	●	③	④	⑤	⑥

問四	①	●	③	④	⑤
問五	①	②	③	④	●
問六	①	●	③	④	⑤

問七	①	②	③	④	●	
問八	●	②	③	④	⑤	
問九	●	②	●	④	⑤	⑥

二

問一	(ア)	●	②	③	④	⑤
	(イ)	①	②	③	④	●
	(ウ)	①	②	③	④	⑤

問二	(あ)	①	②	●	④	⑤
	(い)	①	●	③	④	⑤

問三	I	①	②	③	●	⑤	⑥
	II	●	②	③	④	⑤	⑥
	III	①	②	③	④	●	⑥

問四	①	②	●	④	⑤	
問五	①	②	③	●	④	⑤
問六	●	②	③	④	⑤	

問七	①	②	③	●	⑤
問八	①	②	③	④	●

問九	①	●	③	④	●	⑥
----	---	---	---	---	---	---

50点

50点